樟陰学園報

2026.9
Vol.189

くすのき
Kusunoki

巻頭特集
次世代に続く大学改革

P.3 | 新任の挨拶
大阪樟蔭女子大学附属幼稚園
野口 幸一 園長
樟蔭高等学校
岩村 研志 副校長

P.5 | 特　集
キャンパス紹介　今と昔

P.7 | こもれびの窓
樟蔭で育んだ学びを礎に、
真心と笑顔をお菓子に込めて
小川 美枝さん

P.9 | SHOIN LABO（大学）
書は『読む』から『感じる』へ。
伝統を礎に、学生と描く新たな書の世界。
東野 敏夫 教授

P.14 | あなたの考える『美意識』とはなんですか？

はばたけ、知性。



変わる時代にも、本質は変わらない。

学長挨拶

教養の力で人を育み未来の社会へつなぐ。

建学の精神を受け継ぎ、新たな時代へ。

100年を超える歴史と伝統を持つ樟蔭学園。その伝統を受け継ぐ大阪樟蔭女子大学の学長に就任し、大きな名誉を感じるとともに、その歩みを未来へつないでいく使命をあらためて実感しています。社会や教育を取り巻く環境が大きく変化する今だからこそ、大学が大切にすべき理念を明確に示し、教職員と力を合わせながら歩みを進めていくことが、学長としての大切な役割だと考えています。一方、立場が変わっても学生との距離の近さは変えたくありません。これからも授業で学生と接し、一人ひとりの思いや悩みに寄り添い、表情や声に触れながら日々の変化を感じ取り、それを教育へ生かしていきたいと思います。

樟蔭が受け継いできた『建学の精神』は、高い知性と豊かな情操を持って社会に貢献できる女性の育成です。私はこの言葉を現代に置き換えると『教養（リベラルアーツ）』であると考えています。知識を身に付けるだけでなく、それをどう受け止め、どう判断し、社会で生かしていくのか。その力こそが、AI時代を生きる学生に必要な学びではないでしょうか。

伝統の核を大切に守りながら、時代に合わせて学びを進化させ、学生一人ひとりの可能性を広げられる大学であり続けたいと考えています。

大阪樟蔭女子大学　学長
小森　道彦
Michihiko Komori

大学の価値を、さらに高める

大学を取り巻く環境が大きく変化する今、「樟蔭らしさ」という揺るぎない価値を大切にしながら、その魅力を時代に合わせてさらに発展させていくことが重要だと考えています。そのためには教育内容を充実させるだけでなく、本学ならではの特色を積極的に発信し、樟蔭で学ぶ価値を広く知っていただくことが欠かせません。また、在学生はもちろん卒業生とのつながりを大切にし、卒業後も安心して帰ってこられる大学であり続けたいと考えています。卒業生や地域との交流を通して新たな価値が生まれる循環を育みながら、学生一人ひとりの成長を支え、多くの方に選ばれ、卒業したことを誇りに思っていただける大学を目指して歩みを進めてまいります。

次世代に続く大学改革

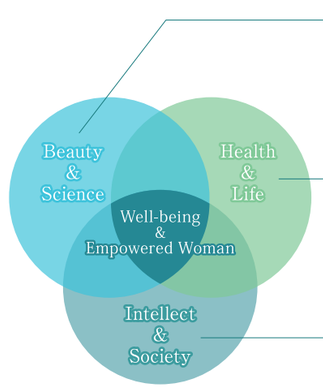
本学では、社会の変化に対応した学部・学科の開設・再編を段階的に進めています。この改革は学生が自ら考え、多様な価値観を受け容れながら、社会で力を発揮できる人材を育むためのものです。教育学部では子どもの成長を一貫して捉える教育へ、化粧ファッション学部では美を文化や社会の視点から探究する学びへ、応用生物科学部（仮称）ではコスメやフードテックを通じて美と健康を科学的に探究する教育・研究を展開します。また、学芸学部では幅広い教養を基盤に専門性を深める教育課程を導入し、健康栄養学部では管理栄養士養成の強みをさらに発展させます。それぞれの学びを通して教養力と専門性を育み、多様化する社会の中で自ら考え行動できる力を養ってほしいと考えています。伝統を大切にしながら学びを進化させ、未来を切り拓く大学を目指します。



※本掲載内容は構想段階のものであり、今後内容や名称が変更となる場合があります。

学部・学科再編の背景と趣旨

これらの改革は、Beauty & Science（美と科学）、Health & Life（健康と生活）、Intellect & Society（知性と社会）の3領域を有機的に結び付け、新たな価値を創造することを目指しています。Shoin Vision 2030のもと、「感性」と「科学」を融合し、全学部が社会に貢献する自律した女性の育成という共通の目標に向かって連携します。その中心となるWell-being&Empowered Womanには、一人ひとりが可能性を広げ、自律した女性として社会に貢献できる力を育むという想いが込められています。



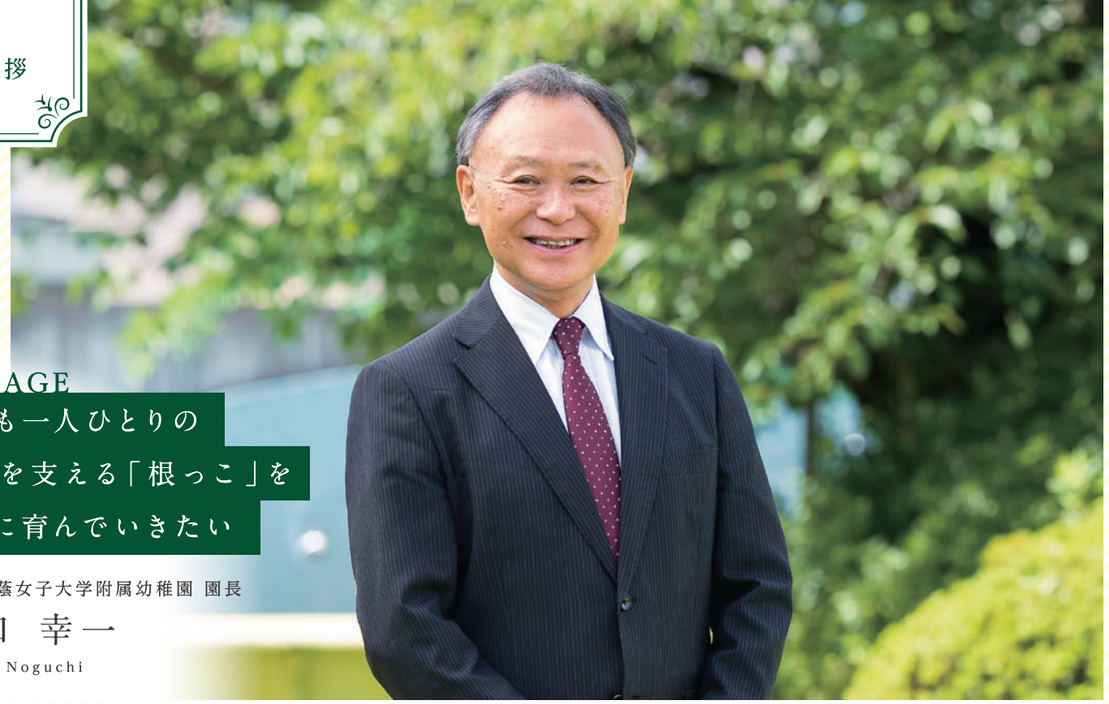
Beauty & Science
化粧ファッション学部
＋
応用生物科学部（仮称）

Health & Life
健康栄養学部
＋
応用生物科学部（仮称）

Intellect & Society
新生学芸学部 ＋ 教育学部

100年の伝統を、次の100年の力へ。

創立以来培ってきた教育の伝統を礎とし、本学はこれからも女子大学としての誇りを胸に、時代の要請に応える改革に取り組んでまいります。新たな学びの場を創造し、社会に貢献できる女性を育成するという使命のもと、次世代を担う女性たちの学びと挑戦を力強く支え、社会とともに歩みながら、未来を切り拓く教育研究活動を推進してまいります。



MESSAGE

子ども一人ひとりの未来を支える「根っこ」をともに育んでいきたい

大阪樟蔭女子大学附属幼稚園 園長
野口　幸一
Koichi Noguchi

Interview

幼児期の学びが未来をつくる



1 子どもに寄り添う園づくりをめざして

このたび、大阪樟蔭女子大学附属幼稚園の園長として、園児一人ひとりの成長を見守る役割を担うことになりました。園児が毎日を安心して過ごし、伸び伸びと育っていける環境を守りながら、これからの幼稚園づくりに取り組んでいきたいと考えています。私が日頃から心掛けているのは、一人ひとりと真摯に向き合い、信頼関係を築いていくことです。それぞれの姿をしっかりと見つめ、成長を支えていきたいと思っています。その積み重ねが、安心して過ごせる環境につながると考えているからです。また、園長という立場になった今は、一人の園児だけではなく園全体を俯瞰し、子供たちが健やかに学び、遊べる環境を整えていくことも大切な役割だと感じています。それぞれの個性や成長の歩幅を大切に見守りながら、幼稚園でのさまざまな経験が豊かな育ちへとつながる環境を築いていきたいと考えています。そして、子どもたちが毎日笑顔で過ごせる幼稚園であり続けられるよう努めてまいります。

2 幼児期だからこそ伝えたい未来へつながる「根っこ」の力

私は、幼児教育で最も大切なのは「根っこ」を育てることだと考えています。花は目に見える成果ですが、それを支える根は普段目にすることができません。しかし、根がしっかり育っていれば、美しい花を咲かせることができます。子どもたちも同じで、幼児期に積み重ねる経験や体験が、その後の成長を支える土台になっていきます。だからこそ、目に見える結果だけを求めるのではなく、その子の内側に育つ力を大切にしたいと思っています。幼児期だからこそ培うことのできる「根っこ」を、日々の保育の中で丁寧に育んでいくことが、本園の教育の根幹です。

3 日々の経験を大切に重ねながら「知・情・意」を育む保育

本園では「知・情・意」のバランスを大切にした教育を実践しています。「知」とは正しいことや本当の意味を知ること、「情」とは友だちをはじめ人を大切に思う心、「意」とは感じたことを行動へ移す強い意志です。この三つはどれか一つだけを伸ばせばよいものではなく、互いに結び付きながら育まれていくものだと考えています。そのため、子どもたちには教室だけでなく、園庭で泥だらけになって遊んだり、自然に触れながら五感をフルに働かせる経験も大切にしてほしいと思っています。園で過ごす毎日の中には、驚きや発見、友達との関わり、試行錯誤など、子どもの成長につながる多くの学びがあります。そうした日々の経験の積み重ねが「知・情・意」を育み、やがて目には見えない「根っこ」となって、一人ひとりの未来へとつながっていくのです。だからこそ私たちは結果を急ぐのではなく、その過程も大事にしていきたいと思います。幼児期にしか経験できない時間を豊かなものにし、子供たちが自分らしく成長できる環境を整えること。それが本園の「根っこを育てる教育」であり、これからも受け継いでいきたい教育理念です。





MESSAGE

伝統を未来へつなぐ学校づくりをともに進めたい

樟蔭高等学校 副校長
岩村　研志
Kenji Iwamura

Interview

新たな価値を生み出す教育を

1 学校の未来を描き、創り続ける

樟蔭高等学校には、長い歴史の中で受け継がれてきた伝統があります。その価値を大切にしながらも、社会や教育を取り巻く環境の変化に応じて、これからの時代にふさわしい学校づくりを進めていくことが重要です。副校長に就任し、その思いをこれまで以上に強く感じています。伝統とは変えずに守り続けるものではなく、本質を大切にしながら時代や社会の情勢に合わせて変化させることで受け継がれていくものです。だからこそ、生徒や保護者の皆さまが学校に求めるものをしっかりと受け止め、樟蔭らしさを生かしながら、今の時代に求められる教育へとつなげていきます。副校長として自ら工夫を重ね、新たな取り組みにも積極的に挑戦しながら学校づくりを進め、その姿勢を発信することで、生徒たちにとってより充実した学びの環境を築いていきたいと思います。また、学校の魅力や教育への思いを積極的に発信しながら、樟蔭ならではの魅力をさらに高め、未来に向かって選ばれる学校であり続けられるよう努めてまいります。

2 一人ひとりの可能性を広げる多彩な学びの環境づくり

私が目指したいのは、生徒が「樟蔭で学びたい」「ここで自分のやりたいことに挑戦したい」と思える学校です。そのためには、それぞれの思いや目標を丁寧に受け止め、自分らしく力を発揮できる環境を整えることが欠かせません。美術表現コースや情報表現コースの新設も、多様化する興味や進路に応え、学びの選択肢を広げるための取り組みです。変化の大きな時代だからこそ、生徒自身が興味や関心を深め、自ら考え、主体的に学びを選択できる環境を充実させていきたいと考えています。それぞれの可能性を引き出し、自信を持って次の一歩を踏み出せるよう支えていくことが、これからの教育に求められる役割だと感じています。



3 生徒の成長を支え続ける樟蔭ならではの温かな教育

樟蔭の大きな強みは、生徒一人ひとりと丁寧に向き合える教員の存在です。日々の学校生活を見守る中で、小さな変化にも気付き、学習面はもちろん、学校生活や進路への悩みにも寄り添うことができます。また教員自身が教育に誇りを持ち、前向きに取り組む姿勢は、学校全体の活気にもつながる大切な力です。私自身も体操部の指導を続ける中で、個々に応じた関わりの大切さを学んできました。同じ言葉でも伝わり方はそれぞれ異なり、その時々に応じた声掛けや支え方が、自ら挑戦しようとする意欲につながっていきます。こうした経験は、副校長として学校全体を考える今の立場にも生かされています。これからも生徒や保護者の皆さまの思いに真摯に耳を傾けながら、樟蔭ならではの教員力をさらに高め、安心して学び、それぞれの目標に向かって歩んでいける環境を整えてまいります。そして、時代の変化にも柔軟に応えながら、多くの方に「ここで学びたい」と選んでいただける学校を目指し、教職員とともに歩みを進めてまいります。

Shoin Gakuen

Campus Map

時を重ね、なお美しく。「今」と「昔」を紡ぐ樟蔭学園

歴史が息づく気品あるモダン建築
その佇まいは、今も変わらず樟蔭らしい風景を



1919年　創立当時の樟蔭学園

旧円形校舎

校舎の中心部には螺旋階段の吹き抜けが設けられ、同心円状に扇形の教室が設けられた。



1959年　直径27mの円形校舎と方形校舎



円形校舎の螺旋階段

桜の木



昔は桜の木の横に樟古館（大）（小）がありました





現在の桜の木

ユリノキ



創立当時の植物園から学園を見守るユリノキ



森 平蔵氏銅像



4 翔空館

時計塔がランドマークの、地上10階建ての校舎。学生が自由に過ごせるロビーのほか、本格的な実験・実習のための設備を備えています。







一番大きな階段教室

5 清志館（学生サポート会館）

大学での学びに関することはもちろん、就職活動やクラブ活動などの課外活動にいたるまで、学生への様々なサポート機能を備えています。





1919年 専用列車

6 樟蔭生専用列車

大軌鉄道（近鉄の前身）の専用列車でそろって通学する樟蔭生の姿は、大阪中の注目を集めた。



記念館の内館

7 記念館

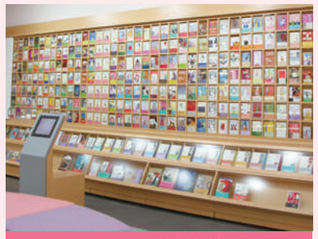
樟蔭学園創立10周年を記念して建築された。外観は石造り風であるが、木造2階建ての銅板葺の寄棟造り。建設当初は、1階は図書閲覧室・書庫と事務室として使用されており、大正モダンの雰囲気を色濃く残した左右非対称の貴重な建物。



旧 館内図書室



大学図書館



田辺聖子文学館

緑翠館1階に、田辺聖子文学館が一般公開されています

8 大学図書館（緑翠館）

大学図書館は、約25万冊の蔵書数を誇る知の宝庫。豊富な雑誌や視聴覚資料のほか、文学界の貴重書を数多く保管しています。緑翠館内には図書館だけでなく「田辺聖子文学館」「しょういん子育て絵本館」「くすのき健康栄養センター」があります。

創立当時の樟古館（大）





内館



創立当時の樟古館（小）



内館



1969年　樟古館（大）（小）
以前はうしろに大学の体育館がありました



現在の樟古館（大）



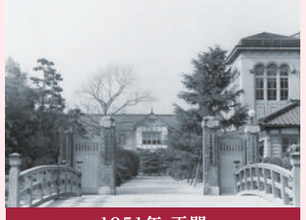
現在の樟古館（小）

1 樟古館（大）
2 樟古館（小）
（旧洗濯教室・旧試食室）

学園開校時に建てられた木造建築の中で唯一残っている建物。
半切妻屋根とハーフティンバースタイルの外観を持つ瀟洒な建物。



1918年 正門



1951年 正門

3 正門



現在の正門



1968年頃 正門



FEATURE

樟蔭で育んだ学びを礎に、真心と笑顔をお菓子に込めて

Graduate Interviews

Taretmessa -タルトメッセ-
オーナーパティシエ

小川 美枝さん（マダムヨシエ） Yoshie Ogawa

1958年3月樟蔭中学校卒業（11期）、1961年3月樟蔭高等学校卒業（13期）、1963年3月大阪樟蔭女子大学別科生活専修卒業（12期）。3人の息子さんのために焼いていたケーキがきっかけとなり、先輩のレストランでデザートづくりに携わる。その後、15年以上経験を積み「Taretmessa（タルトメッセ）」をオープン。84歳となった現在も現役のオーナーパティシエとして店頭に立ち、新しい菓子づくりにも意欲的に挑戦を続けている。「笑顔になっていただけることが一番の喜び」と美枝さん。樟蔭で培った学びを胸に、人を思いやる温かな心をお菓子づくりに込め続けている。









1 おやつ作りから始まったパティシエ人生

私がパティシエになったきっかけは、息子たちのおやつでした。家で焼いたケーキを食べさせているうちに、ご縁があってレストラン「ピエトラサンタ」のデザートを作らせていただくことに。お店からは「女性のお客さんが綺麗に食べていただけるように作ってほしい」と依頼され、お客様のことを考えながら工夫を重ねる毎日でした。その時の経験が、私のお菓子づくりの原点になっています。





2 学び続ける姿勢を力に自身の店を開く



レストランでデザートづくりの経験を重ねるうちに、「自分のお店を持ちたい」という思いが大きくなり、1996年に「タルトメッセ」を開業しました。開業当初は厳しい言葉を掛けられることもありましたが、苦しい時こそ前を向き、諦めず自分のできることを積み重ねてきました。

いつも現状に満足することなく「本物の基礎を学びたい」という思いで、年1回、東京で開催されていたフランス人パティシエによる講習会「フランス文化を識る会」に6年間通い、本場のフランス菓子の技術を学びました。さらに、京都の名店「オ・グルニエ・ドール」の西原金蔵シェフの教室にも2年間通い、研鑽を積みました。タルトのレシピは独自のものですが、こうした学び続ける姿勢とたゆまぬ努力が、今日のおいしさを支えているのだと思います。



大学の卒業式にて
友人と袴で記念撮影



高校時代の仮装会
山本国男先生（写真右）も
一緒に仮装を



高3夏組の山本国男先生と
クラスメートと同窓会旅行。

3 樟蔭で育んだ学びが菓子づくりに活かされる

振り返ると、今のお菓子づくりの土台は樟蔭での学びにあると感じています。家庭科の授業では、魚の三枚おろしをはじめ、当時にしては珍しい本格的な調理実習がありました。その経験が自然と身に付き、今では“お料理のノウハウ”としてお菓子づくりにも活かされています。また、先生方は厳しさの中にも温かさがありました。技術だけでなく、真摯に向き合う姿勢や丁寧に取り組む大切さも教えていただいたように思います。そんな環境の中で学べたことは、今の私にとって大きな財産です。



4 お菓子に思いを込めて笑顔を未来へつなぐ

当時の思い出で何より印象に残っているのは、クラスメイトとのつながりです。みんなとは家族と思えるほど仲が良く、卒業後も同窓会で再会できる関係が続いています。樟蔭では勉強はもちろん、人との関わり方や思いやりの大切さも学ばせてもらいました。今でもお客様や仲間とのご縁を大切にできるのは、あの頃に育まれた温かなつながりがあったからだと思っています。84歳になった今「これからも、挑戦していきたい」という気持ちで、お菓子で皆さんに笑顔を届けていきたいです。

卒業生の方々のご活躍の様子をお知らせください。

学園広報課：TEL.06-6723-8152

ご活躍されている卒業生の情報をお寄せいただき、みなさまの力をお借りして、「こもれびの窓」で卒業生の姿をお伝えしていきたいと思います。身近でご活躍の卒業生の様子を学園広報課までお知らせくださいますよう、お願いいたします。